
LactPren(らくとぷれん)

～農業体験・環境教育を主題とした
地域連携モデルの構想と提案～

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの名称、目的など

LactPren とは、「地域の活性化と環境保全」のフランス語訳である、L'activation et la Protection de l'environnement の下線部分(Lact+Pr+en)を用いた造語である。

本プロジェクトには、以下2点の目的がある。

- ① 京都市伏見区深草地域および京都市北区小野郷地域を中心に活動を行った。対象地域の人々および諸団体・諸機関と連携・協力し、農業体験活動や環境整備活動の実践的活動を通して、地域貢献を行った。

【実践的活動を通じた地域連携】

- ② 農業体験、環境整備活動等の実践的活動を踏まえた上で、近年重要視されている環境教育を主軸とした地域連携の在り方を検討し、地域連携のモデルを構想するための事前調査を行った。

【環境教育を軸とした地域連携モデルの構想】

各項目についての詳細

①について

昨今の学校教育では地域との連携・協力が重要であると謳われている。そのため、教職を強く希望する我々自身が農業体験や環境整備活動等の実践的活動を行い、教師の目線に立って各地域の工夫や魅力を学び、それらを学校教育においてどのように生かすことができるのか考えていった。

②について

本プロジェクトの主要な活動である農業体験や環境整備活動等は、生活科や社会科、家庭科や総合的な学習の時間などに関連するものである。子どもたちがこれらの農業体験や環境整備活動に参加することで、新しい認識を得ることができるのではと考えた。

さらに、学校教育において地域連携が重要視されていることは言うまでもないが多くの取り組みが継続性や計画性の面において課題を有している。我々は、幼稚園から中学校までの継続性のある環境教育を主軸とした地域連携モデルを構想に向けて活動した。

深草地域においては、農業体験を軸として幼稚園、小学校、中学校を通じた地域連携モデルの構想に向けて事前調査を行うに留まった。また、小野郷地域においては、地域の方々と協力し農業体験教室を行う中で、我々も体験教室の企画や、地域活性化についての提案を行った。

2. 代表者および構成員

・代表者：

森川 孝 社会領域専攻 3回生

・構成員：

石野 沙織 社会領域専攻 4回生

小林 未沙 社会領域専攻 4回生

坂根まさら 社会領域専攻 4回生

西尾 愛美 社会領域専攻 4回生

岸本 大樹 社会領域専攻 2回生

高下 真由 社会領域専攻 2回生

中牟田奈歩 社会領域専攻 2回生

水上 咲希 社会領域専攻 2回生

森山祐之朗 社会領域専攻 2回生

山際 蓮 社会領域専攻 2回生

木村 純也 社会領域専攻 1回生

世古 千春 家庭領域専攻 1回生

世古 春香 社会領域専攻 1回生

勢登 加菜 社会領域専攻 1回生

竹田 美月 社会領域専攻 1回生

福井 貴子 社会領域専攻 1回生

3. 助言教員

武田 一郎先生(社会科学科)

石川 誠先生(社会科学科)

アンドリュー・オーバーマイヤー先生
(英文学科)

4. その他

・協力団体

NPO 法人 京都北山悠悠自然塾

NPO 法人 深草ふれあい隊 竹と緑

・協力者

小仲 一輝 本学大学院

社会科教育専修

大上 拓也 本学大学院

社会科教育専修

伊藤大二郎 社会領域専攻 4回生

木田 祐介 社会領域専攻 4回生

佐古田健介 社会領域専攻 4回生

杉崎 文香 社会領域専攻 4回生

山田 義和 社会領域専攻 4回生

板谷 寿美 社会領域専攻 3回生

第2章 内容や実施経過など

1. 京都市北区小野郷にて

【概要】

京都市北区に有名な北山杉で知られている小野郷地域がある。小野郷は京都市の中心部からバスで一時間程度の距離でありながら、清流や青々とした森林、澄んだ空気という魅力的な環境をもつ地域である。

一方、小野郷は現在、住民の高齢化が深刻な問題となっている。そのため、耕作放棄地の活用方法や、地域全体の活性化について、行政(京都市)や地域住民、NPO 等が様々な取り組みを行っている。

LactPren は、平成 22 年度より「e-project

@kyokyo」を活用し、農業体験を通して地域の活性化について考える活動を行ってきた。今年度も小野郷地域で農業体験を通じた地域連携と、環境教育に目を向けた活動を行った。



【京都市中心部から見た小野郷の地図】

【実施内容】

(1) 体験学習

① 4/28・5/3：田植え

② 7/21：間伐

京都が誇る北山杉に触れながら間伐体験をした。林業が抱える現状と、森林に関する子どもたちの認識、本来あるべき林業の姿を踏まえながら体験を行うことで以下の新しい視点を得ることができた。

- ・森林の伐採を行うことが森の荒廃や、環境悪化につながるというイメージが定着している。
- ・しかし、木を伐らないことは、逆に山の荒廃をもたらす風水害等の自然災害等に弱い山になることや、二酸化炭素の吸収量が減少する等の問題点が生じる。
- ・林業の従事者が減少し、手入れを行わない山が増加している。
- ・これらの問題がさらに進めば、森林の公益機能が低下し、私たちの生活に支障をきたす可能性が高くなる。
- ・したがって適度に間伐などを行う必要があり、減少している林業従事者の増加させなければならない。

③ 10/6・10/13・10/20・10/27

11/3・11/17・11/24：朝市への参加

地域活性化への取り組みとして NPO が企画した朝市に参加し、野菜の販売や芋ほり体験をした。

(2) 小野郷における合宿研修

④ 8/17-19：小野郷合宿研修

今年度は、地域の魅力を活かした体験学習を実施したいとの思いから、小野郷の休耕田を利用して、畑づくり体験学習を実施した。

また、小学生を対象とした畑づくりの体験教室も企画・立案した。この企画には、畑づくりだけでなく小野郷の自然を生かした川遊び等も含まれており今後の実施に向けて更なる検討をしていく。

さらに NPO の方々と小野郷地域の活性化に向けてどのような取り組みが可能であるか意見交換を行い、我々は、小野郷の豊かな自然を生かした農業体験をはじめとする自然体験を大学生等に提供することで地域活性化につながるのではないかと提案を行った。

将来、教職を目指す我々にとって農業体験等の自然体験は有意義かつ、積極的に取り入れられるべきものであり、大学生等を対象とした体験活動の企画・運営ができるよう、今後も体験教室を企画することとなった。



【堆肥をまく】



【トラクターによる耕運の体験】



【集合写真(合宿 1 日目)】

(3) 藤陵祭関連

⑤ 5/4：田植え

藤陵祭で小野郷我々の活動の PR を兼ねて販売する予定の米の田植えを行った。

機械と手植えの両方で田植えを行ったが、はじめて田植えをするメンバーもいて、貴重な経験ができた。



【苗を植える(5月4日)】

⑥ 11/8：野菜の収穫

藤陵祭で販売するために、大根、人参、かぼちゃの収穫を行った。今年は台風や鹿の被害により、収穫量が減少した。



【大根の収穫】

⑦ 11/8-10：藤陵祭

我々の活動と、小野郷地域の PR を兼ねて野菜や米、大根煮の販売を行った。

今年度は、かぼちゃプリンを販売したが、販売開始2分で売り切れるほどの大人気であった。また、ふれあい伏見フェスタで好評を得た北山杉を用いた工作教室を開いた。

さらに、小野郷と LactPren の活動を紹介したパネルを展示し、パンフレットも配布したほか、活動の様子を写した写真をスライドショーで流した。



【毎年、好評の大根煮の販売(藤陵祭2日目)】

2. 大岩山清掃活動

【概要】

大岩山は伏見区と山科区にまたがる山である。以前から産業廃棄物をはじめとする不法

投棄が問題となっていたが、2008年度に行政(伏見区役所深草支所)、NPO、京都教育大学等の大学生、地域住民らが協力し、100tものゴミを回収した。

2009年度には、行政、NPO、地域住民らと、本学の体育会諸クラブとが協力し、山頂付近の雑木伐採などを行い、伏見を一望できる展望台を設置した。

2010年度には LactPren と本学体育会、行政、NPO、地域住民らが協力し、展望台までの遊歩道を完成させた。

2008年度から上記のような取り組みを行っているが、未だ不法投棄は続いているため行政、NPO、地域住民などが定期的に清掃を行っており、LactPren もこれに参加している。



【大岩山周辺の地図】

【実施内容】

⑧ 4/24：大岩山参道付近の清掃活動

本学体育会のアメリカンフットボール部、社会領域専攻1回生の協力を得ながら、枯木の除去などの整備を行った。



【冷蔵庫を引き上げる本学アメフト部】

⑨ 10/26 : 大岩山展望台付近の清掃活動

⑩ 11/30・12/1 : 竹咲プロジェクト

大岩山ポンプ場付近に、大岩山の竹を用いた竹柵を完成させた。本学の学生(LactPrenをはじめとするのべ40人)はじめ、行政や深草地域のNPO、他大学の学生の協力を得て完成させることができた。



【完成した竹柵(12月1日)】

第3章 結果や成果など

1. 京都市北区小野郷にて

今年度の小野郷での活動は、田植えから始まり、北山杉の間伐、芋の苗植え、夏合宿、朝市、収穫、餅つきであった。

どの活動においてもNPOの方々と共に協力しながら作業を進め、地域の活性化や子どもたちにどのような農業体験や環境教育をすることが可能なのかわ、意見を交換しながら進めていくことができた。

また、夏合宿では畑づくりを行い、大根などの種をまき、藤陵祭で販売することができた。これは、私たちの活動だけではなく小野郷地域のPRの絶好の機会でもある。

地域との関わりは近年の学校教育で重要視されている。教職を強く希望する私たちにとって、この活動は非常に意義のあるものとなり、農業体験等の自然体験をすることは、将来、教壇に立った際に子どもたちに自分の経験から伝えることができるという観点からも、我々が得たものは大きいと考える。

2. 大岩山清掃活動

今年度は定期的に行っている整備活動に加えて、竹柵を設置することができた。このような整備活動を継続していくことで、大岩山の不法投棄根絶や、地域住民にとってより魅力のある里山にしたい。

さらに、大岩山の整備活動に本学の学生がより多く参加することで、深草地域と本学の良好な関係をつくっていききたい。

今後も定期的に清掃活動や竹林、竹柵の整備を行うことで、本学と深草地域との関わりを深めていききたい。

第4章 まとめや反省、今後の展望など

1. まとめ

小野郷の方々や深草地域の方々との交流によって得たものは大きく、様々な職種や異なる年齢の方々との触れあいにより我々にはなかった視点から教育について考えることができた。これは、地域連携モデルを構想する上で、大きな手掛かりになりうると考える。

恒例となってきた大岩山の清掃活動に関しても本学体育会のアメリカンフットボール部、社会領域専攻1回生の有志など、多くの本学の学生の力を借り、実行することが出来た。

小野郷地域や本学周辺の深草地域での活動をすることで、各地域の取り組み、良さを感じ取ることができた。



【雨天の中、竹を運ぶ参加者(大岩山にて)】

2. 反省

今年の反省として、LactPren の活動の PR が学外はもちろんのこと、学内でもまだまだ不十分であったことがあげられる。また、小野郷での体験教室を企画・立案をしたが、実践に結びつけることができなかった。この経験をもとに、来年度は小野郷という地域の特色を我々自身が更に見つめなおし、具体的かつ地域の特色を生かした企画・立案・実践が大きな目標となった。

また、今年度から参加した構成員の中に農業体験をしたことがない学生がいた。同じような学生は学内に多くいることが予想されるが、彼らをも活動に取り組みすることで、新たな目線やアイデアを引き出していきたい。そのためにも、我々の活動をいま以上に学内に広め、構成員だけではなく、他の学生との積極的な交流を計りたい。

3. 今後の展望

昨年度同様、NPO 法人京都北山悠悠自然塾と連携を取りながら、小野郷での地域活性化と体験学習を進め、大学周辺の地域における環境教育の実践や、考察にも取り組みたいと考えている。

この活動から、学校と地域が連携し教育活動を行うために必要なことは何なのか、現状を踏まえながら、教員養成系大学の学生として今何ができるのかを考える。

大岩山清掃活動についても行政(京都市)や地域住民、NPO 法人 深草ふれあい隊 竹と緑らと協力して定期的に清掃活動を行い、不法投棄の根絶に向けて活動していきたい。

さらに、地域連携モデルの構想についても今年度行った事前調査をもとに作成し、提案していきたい。

4. 添付資料

【京都新聞 朝刊 平成 25 年 12 月 27 日(金)】



伏見・大岩山を美しく

伐採の竹使い 山道に柵

伐採した竹を使って山道の脇に柵を設置するボランティア(京都市伏見区・大岩山)

地元市民団体や学生ボランティア

京都市伏見区の大岩山の整備に取り組む市民団体「ふかぐさ自然環境再生ネットワーク推進委員会」が、山で伐採した竹を使って山道の両脇に柵を設けた。竹林の手入れと景観の改善を同時に取り組んだ。メンバーは「大勢の人に共通の良さ大岩山のトレッキングを楽しんでほしい」としている。

竹林が広がる大岩山には5年前まで、100mを超える高みが捨てられていた。竹柵設置プロジェクトは、撤去に関わった住民らが美観によって不法投棄の再発を防ぐ環境づくりをしようと企画した。

「トレッキング楽しんで」

柵は、市上下水道局桃山ポンプ所から西へ向かう道沿いに約80mに設置。地面に打ち込んだ高さ80cmのプラスチックのくいに、伐採した竹を横向けにつないで固定した。山道は住民が整備した展望台に続いており、山歩きのコースとして定着している。

作業は、11月30日から2日間実施した。地元住民や学生ボランティアら計60人が茂った竹林を間伐したり、9月の台風18号で倒れた竹を伐採して、柵に活用した。

推進委代表の京都教育大の武田一郎教授は「くいはプラスチック製を使用したので、横柵の竹が朽ちても比較的容易に再生できる。今後も継続的に取り組んでいければ」と意気込んでいる。

(大西幹子)